

「千載和歌集」の「詞書」の語彙について

若林 俊英

一

本稿は、第七番めの勅撰和歌集である「千載和歌集」の詞書・左注（以下、「千載詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、いささかまとめたものである。

語彙調査をするに当たって問題となる単位語のとり方は、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（笠間書院刊。以下、『語い表』と略称する）における規定をおおむね使用させていただいた。⁽¹⁾また、「千載和歌集」の語数調査に関しては、滝沢貞夫氏編『千載集総索引』（笠間書院刊）の学恩に浴した。⁽²⁾なお、以下、語彙数に関して、特に注記しない場合は、異なり語数である。

二 (1)

「千載詞書」の異なり語数・延べ語数は、それぞれ一二五七語、六九九九語であり、平均使用度数は五・五七である。これらの数値を、以前調査したことがある三代集や「新古今和歌集」の詞書・左注（以

下、それぞれ「三代集詞書」「新古今詞書」と略称する⁽³⁾とともに示したものが表(1)である。

表(1)から、「千載詞書」は、異なり語数・延べ語数のいずれにおいても「新古今詞書」より少ないことがわかる。一方、平均使用度数においては、「新古今詞書」とほぼ同じであることもわかる。

(2)

次に、「千載詞書」の基幹語彙についてふれる。

ある作品（群）の基幹語彙を認定する場合の基準については、様々な考え方があろうが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の使用度数を

表(1)

作品名	異なり語数	延べ語数	平均使用度数
三代集詞書	2,353	16,177	6.88
千載詞集	1,257	6,999	5.57
新古今詞書	1,442	8,019	5.56

持つ語をもって、仮に基幹語とする。

「千載詞書」において、一パーミル（七）以上の使用度数を持つ語は、異なり語数で一四一語、延べ語数で五〇〇七語である。この延べ語数五〇〇七語は、総延べ語数の七一・五四パーセントとなるが、筆者が以前調査した「後撰和歌集」や「拾遺和歌集」の詞書・左注（以下、それぞれ「後撰詞書」「拾遺詞書」と略称する⁽⁴⁾）における七一・二七パーセント、六七・一三パーセントや、「新古今詞書」における七一・四二パーセントと比較的近い数値であることからして、この一四一語を「千載詞書」の基幹語彙とすることには、ある程度の妥当性があると考えられる。したがって、以下の考察においては、この一四一語を基幹語彙として使用する。

なお、資料として「千載詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので、参照願いたい。

三―(1)

次に、「千載詞書」の基幹語彙と、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」⁽⁵⁾（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）とを比較し、考察を加えたい。

表（2）は、西田直敏氏が「平家物語」においてなされたものとおおむね同様な方法により「千載詞書」の基幹語彙と「平安和文基本語彙」とを段階分けし、「千載詞書」の基幹語彙の所属段階をもとにして、両者の共通語数・非共通語数を各段階別に示したものである。

段階分けを行った場合、どの程度の所属段階差から、その使用が特

表（2）

段 階	共通語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
2	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0
3	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0
4	6	0	0	1	1	2	0	1	1	2
5	13	4	1	1	1	3	2	0	1	2
6	30	0	3	5	8	4	4	5	1	5
7	39	1	2	0	5	13	7	5	6	18
8	14	0	0	1	1	1	3	7	1	7
計	107	5	8	8	17	24	17	18	10	34

異であると思なすかについては、様々な考え方があろう。ここでは、二段階以上の所属段階差がある語をもって特徴的な使用語とみなし、以下の主たる考察の対象とした。

(2)

表(2)によると、特徴的な使用語は、①段階一語、②段階二語、④段階二語、⑤段階七語、⑥段階一七語、⑦段階二二語、⑧段階六語の計五六語、うち「千載詞書」における所属段階の方が上位のものは七語、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位のものは四九語となる。

以下、具体的に示すと

I 「千載詞書」における所属段階の方が上位の語

「よむ(詠)」 「とき(時)」 「うた(歌)」 「つかはす(遣)」 「こひ(恋)」 「まかる(罷)」 「たび(旅)」

II 「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語

「す(為)」 「ひと(人)」 「こと(事)」 「あり(有)」 「みる(見)」 「はべり(侍)」 「なる(成)」 「もの(物・者)」 「おもふ(思)」 「また(又)」 「うへ(上)」 「うち(内・内裏)」 「その(其)」 「ひとびと(人人)」 「きく(聞)」 「ひ(日)」 「み(身)」 「なか(中)」 「おなじ(同)」 「まゐる(参)」 「ところ(所)」 「かの(彼)」 「なし(無)」 「ほど(程)」 「よ(世・代)」 「まへ(前)」 「よ(夜)」 「ゐん(院)」 「いづ(出)」 「なく(泣・鳴)」 「かへる(帰)」 「はる(春)」 「あふ(逢)」 「しのぶ(偲・忍、四段)」 「ちゅうじやう

(中将) 「かみ(上・守)」 「にようばう(女房)」 「たつ(立、四段)」 「つかうまつる(仕)」 「みこ(御子)」 「かく(書)」 「みち(道)」 「ゆく(行)」 「みゆ(見)」 「わたる(渡)」 「をとこ(男)」 「ついで(序)」 「はじめ(始)」 「ふる(降)」

以上のようになるが、これらの語群のうち、宮島達夫氏が『語い表』において示された「一四作品共通語」と共通するものは、Iには一語、IIには三一語あることがわかる。また、樺島忠夫氏が「平安時代文学基本語彙」として示された三〇一語との共通語は、Iにおいては四語、IIにおいては四〇語であることもわかった。

(3)

次に、「千載詞書」における所属段階の方が上位の七語について、より具体的にみると、その全てが、かつて調査した「新古今詞書」での同様な語群と共通することがわかった。また、「拾遺詞書」での同様な語群と比較してみると、和歌に関する「よむ」「うた」、敬語の「つかはす」「まかる」、時に関する「とき」の五語が共通することもわかった。

ここで注意しなければならないのは、「こひ」「たび」という二語が、「新古今詞書」とは共通し、「拾遺詞書」とは共通しないということである。「千載詞書」における「こひ」「たび」という語の頻用は、和歌の題材の変化によるものであろうが、そのような観点からみると、この二語は、ある意味での時代語的要素を持ったものと言えようか。

次に、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群に

ついてふれる。

ここに属するのは、既述したように四九語であるが、これらは「新古今詞書」における同様な語群と比較すると、その約六〇パーセントの二九語が、「拾遺詞書」における語群と比較すると、約四〇パーセントの二〇語が、それぞれ共通している。すなわち、ここには、かつてもふれたが、「もの」「こと」「ひと」「す」「あり」「なし」「また」等に代表される、「詞書」本来の簡潔性・具体性とは対極にある、「詞書」に比較的使用されにくい語が多数所属していることがわかる。

次に、「平安和文基本語彙」と共通しない語についてふれる。

ここに属するのは、表(2)でわかるように三四語である。これらの語は、便宜的ではあるが、

I 和歌関係 「ひやくしゆ(百首)」「だい(題)」「うたあはせ(歌

合)」「かきつく(書付、下二段)」「じつしゆ(十首)」「

II 時・時間関係 「はじめて(始)⁽¹⁰⁾」「にねん(二年)」「ぐわんねん

(元年)」

III 人物関係 「ほりかはるん(堀川院)」「うだいじん(右大臣)」

「すとくゑん(崇徳院)」「せつしやう(摂政)」「だ

いじやうだいじん(太政大臣)」「ないだいじん(内

大臣)」「にでうゑん(二条院)」「しらかはるん(白

河院)」「としただ(俊忠)」

IV 題材関係

「じゆつくわい(述懐)」「くれ(暮)」「いはひ(祝)⁽¹¹⁾」「
「おちば(落葉)」「やどり(宿)」「うのはな(卯花)」

「せきち(閑路)」

V 場・場面関係 「やしる(社)」「だいじやうゑ(大嘗会)」「ほ

ふしやうじ(法性寺)」「かも(賀茂)」「やま

ら(山寺)」「とばどの(鳥羽殿)」「なかのゑん

(中院)」

VI その他 「こもりゑ(籠居)」「ゆきがた(悠紀方)」「すぎが

た(主基方)」

のように、分類することができる。

右の分類でわかるように、ここには、「詞書」の基本的要素である作者や時、場所・場面、題材等に関する語が多数含まれており、その点において、「詞書」で頻用されて然るべきものであると言える。

四―(1)

次に、「千載詞書」の語彙の語種別、品詞別特色についてみることにする。

表(3)は、三―(1)で行ったのと同様な段階分けを「千載詞書」の全語彙について行い、各段階における語種別、品詞別所属語数を、比率とともに示したものである。

以下、表(3)により、「千載詞書」の語彙について語種別、品詞別の順に考える。

(2)

まず、語種別特色についてふれる。

「千載詞書」の語彙の語種別比率は、表(3)のように和語六八・〇

表(3)

段階	所 属 語 数	語 種 別 語 数			品 詞 別 語 数								
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等
1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
2	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
3	2	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
4	8	6	2	0	5	3	0	0	0	0	0	0	0
5	15	14	0	1	9	6	0	0	0	0	0	0	0
6	35	31	4	0	24	7	1	0	1	2	0	0	0
7	57	43	14	0	39	14	3	0	1	0	0	0	0
8	146	113	29	4	108	33	3	0	1	1	0	0	0
9	309	218	79	12	219	67	11	3	8	0	1	0	0
10	682	425	239	18	518	109	21	10	9	1	0	0	14
合 計	1,257	855	367	35	925	241	39	13	20	4	1	0	14
	%	68.0	29.2	2.8	73.6	19.2	3.1	1.0	1.6	0.3	0.1	0.0	1.1

パーセント、漢語二九・二パーセント、混種語二・八パーセントである。漢語の数値を他のいくつかの「詞書」と比較すると、「古今和歌集」の詞書・左注(以下、「古今詞書」と略称する)⁽¹³⁾一〇・〇パーセント、「後撰詞書」一〇・八パーセント、「拾遺詞書」二〇・一パーセントと、三代集などの「詞書」における比率よりも高いのは当然としても、中世の「新古今詞書」の二六・六パーセントよりも高い点は注目値する。ただし、延べ語数における比率でみると、「新古今詞書」が一九・一パーセントであるのに対し、「千載詞書」は一四・八パーセントと、相当低率になっている。

一方、『語い表』所載の諸作品と比較すると、「徒然草」(二八・一パーセント)や「大鏡」(二五・五パーセント)と比較的近い点、やはり和歌の世界の一翼を担う「詞書」の世界にも時代の反映が色濃くみられるということであろうか。

(3)

(2)で、「千載詞書」の語彙における漢語の比率は、異なり語数で見ると、「新古今詞書」におけるそれよりも高いが、延べ語数で見ると、反対に、相当低い点についてふれたが、ここでは、この点について、より詳しくみることにする。

表(4)は、各「詞書」における漢語の異なり語数、延べ語数と、それぞれの全異なり語数、全延べ語数に対する比率、異なり語数での比率をとした場合の延べ語数での比率の比を一覧にしたものである。

表(4)においては、「拾遺詞書」における比の大きさと、「千載詞

表(4)

	異なり語数	比率 A	延べ語数	比率 B	比 B/A
古今詞書	89	10.0	324	8.2	0.82
後撰詞書	138	10.8	485	6.9	0.64
拾遺詞書	258	20.1	1,045	20.1	1.00
千載詞書	367	29.2	1,035	14.8	0.51
新古今詞書	384	26.6	1,531	19.1	0.72

とがわかる。

言うまでもなく、平均使用度数には、各作品で相当な差があり、その差を無視した上での比の比較には問題もある。しかし、「後撰詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の比の比較は、平均使用度数もほぼ等しい点から考え、有効性を持つと思われる。

以上のような点からみると、「千載詞書」の漢語使用は、『語い表』

書」における比の小ささが注目値する。

一方、『語い表』所載の諸作品における同様の値を計算すると、院政期の作品である「大鏡」が〇・五八、中世の作品である「方丈記」が〇・五三、「徒然草」が〇・四四となる。また、中古の作品でみると、「伊勢物語」「古今和歌集」が〇・四九〇・五〇、「更級日記」「源氏物語」「枕草子」「蜻蛉日記」が〇・五四〇・五七、「土左日記」「竹取物語」が〇・六四、「後撰和歌集」が〇・六七、「紫式部日記」が〇・八七であるこ

所載の作品の多くと似たような傾向を持つものの、「後撰詞書」や「新古今詞書」とは異質なものであると言えそうである。

(4)

次に、品詞別特色についてふれる。

表(3)により、「千載詞書」の語彙の品詞構成比をみると、名詞が七三・六パーセントであることが目を引く。この値は、「拾遺詞書」の七四・〇パーセント、「新古今詞書」の七二・〇パーセントと比較的近いものであることがわかる。一方、表(3)には示さなかったが、延べ語数における比率でみると、「千載詞書」は六三・七パーセントであり、この値は、「拾遺詞書」の六六・七パーセント、「新古今詞書」の六七・三パーセントと比較すると多少低いものの、「古今詞書」の六〇・一パーセントよりも高いものであることもわかる。また、「千載詞書」のこれらの値は、『語い表』所載の一四作品のどれよりも高いものである。

一方、形容語類(形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)をみると、「千載詞書」における比率は六・〇パーセントとなるが、この値は、『語い表』所載の一四作品のどれよりも低いものである。⁽¹⁵⁾しかし、『詞書』が、

和歌・俳句などの作者・制作の動機・日時・場所・場面・対象・目的、その他前後の事情等について記し、また作品の主題・内容等について説明を加えたもの⁽¹⁶⁾

であることからして、この形容語類の比率の低さは、むしろ当然であ

表(5)

段階	所 属 語 数	三代集詞書		新古今詞書		竹取物語		伊勢物語		源氏物語	
		共 通	非共通	共 通	非共通	共 通	非共通	共 通	非共通	共 通	非共通
1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
2	2	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0
3	2	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0
4	8	8	0	8	0	5	3	7	1	7	1
5	15	14	1	15	0	12	3	13	2	13	2
6	35	34	1	35	0	25	10	28	7	33	2
7	57	48	9	57	0	29	28	37	20	50	7
8	146	99	47	126	20	48	98	83	63	109	37
9	309	176	133	196	113	95	214	122	187	203	106
10	682	235	447	210	472	105	577	141	541	332	350
計	1,257	619	638	652	605	324	933	436	821	752	505
共 通 度		0.207		0.319		0.144		0.173		0.063	

段階	所 属 語 数	更級日記		大 鏡		方 丈 記		徒 然 草	
		共 通	非共通	共 通	非共通	共 通	非共通	共 通	非共通
1	1	1	0	1	0	0	1	1	0
2	2	2	0	2	0	1	1	2	0
3	2	2	0	2	0	2	0	2	0
4	8	4	4	6	2	4	4	6	2
5	15	13	2	14	1	11	4	13	2
6	35	31	4	34	1	22	13	30	5
7	57	36	21	50	7	27	30	43	14
8	146	84	62	104	42	55	91	96	50
9	309	131	178	179	130	72	237	154	155
10	682	158	524	260	422	97	585	221	461
計	1,257	462	795	652	605	291	966	568	689
共 通 度		0.168		0.120		0.138		0.115	

と思われる。

以上みてきたように、「千載詞書」の語彙は、品詞構成比上、一般の和文脈系作品より名詞の比率が高く形容語類の比率が低い⁽¹⁷⁾。「詞書」の語彙の特色とも考えられる性格を具備したものであると言える。

五

次に、「千載詞書」の語彙と、「三代集詞書」「新古今詞書」「竹取物語」「伊勢物語」「源氏物語」「更級日記」「大鏡」「方丈記」「徒然草」の各語彙との共通性についてみることに、⁽¹⁸⁾「千載詞書」の語彙の特色の一端にふれる。

表(5)は、「千載詞書」の語彙を中心にし、各作品の語彙との共通語数・非共通語数、共通度についてまとめたものである。なお、「竹取物語」

以下の作品における各語の有無については、『語い表』によった。

以下、表(5)からわかる点について述べる。

まず、共通語数についてであるが、語彙量の比較的小さい「竹取物語」や「方丈記」との共通語数が⑥段階あたりから、他作品のそれと比較した場合、少なくなってくる。また、全体を通しての共通語数では、語彙量の大きい「源氏物語」とのものが圧倒的に多く、次いで、「新古今詞書」と「大鏡」が並び、「三代集詞書」「徒然草」がそれらに続く。各「詞書」との共通語数の多さは当然と言えようが、語彙量の比較的大きい「大鏡」や「徒然草」との共通語数が思った程多くな⁽¹⁹⁾いのが目を書く。

次に、共通度についてであるが、「新古今詞書」とのそれが最も高く、「三代集詞書」「伊勢物語」「更級日記」がそれに次ぐ。

語彙量の比較的小さい「方丈記」との共通度は、平安期の「竹取物語」のそれに次ぐものの、院政期の「大鏡」や中世の「徒然草」との共通度の低さは、共通語数の少なさ同様、注目される。

六

次に、順位相関の観点から「千載詞書」の語彙についてふれる。

右のことを行うに当たっては、「千載詞書」「新古今詞書」「三代集詞書」の各基幹語彙のうち、三作品に共通する七五語を用いた。

表(6)は、対象とする七五語を「千載詞書」の使用頻度順に並べ、各「詞書」における頻度順位とともに示したものである。この表(6)⁽²⁰⁾をもとにし、スピアマンの計算式により順位相関係数を計算したところ、

ろ、「千載詞書」と「新古今詞書」との間が〇・七八六、「千載詞書」と「三代集詞書」との間が〇・六四九、「新古今詞書」と「三代集詞書」との間が〇・七〇六という結果を得たが、以上の相関係数から考えると、各「詞書」の語彙の間には、強い相関が認められる。特に、「千載詞書」と「新古今詞書」との相関は、非常に強いと言える。

一方、対象となっている語彙が同一ではないので、単純な比較はできないが、かつて計算した「三代集詞書」と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」との相関係数⁽²¹⁾と、今回行った「三代集詞書」と「千載詞書」との相関係数から考えると、「千載詞書」と「三代集詞書」とは、相当強い相関関係にあるものの、「三代集詞書」と「古今詞書」等との相関よりは弱いものであると言える。しかし、これは時代的な条件等を勘案すると、当然の帰結と思われるものであろう。

ところで、「千載詞書」と「三代集詞書」との相関係数は、「新古今詞書」と「三代集詞書」との相関係数と比較することにより、注目されるであろう。すなわち、「古今和歌集」から脱却して、新しい「古今和歌集」たらんとした「新古今和歌集」の「詞書」の語彙と「三代集詞書」のそれとの相関が、「新古今和歌集」よりは相対的に保守的と考えられる「千載和歌集」の「詞書」の語彙と「三代集詞書」のそれとの相関よりも強いからである。何故このような結果になるかについては興味をそそるが、その説明は今後の課題としたい。

七

「千載詞書」の漢語の使用が、使用比の点で「後撰詞書」や「新古

表(6)

No.	単 語	千 載	新 古	三 代	No.	単 語	千 載	新 古	三 代
1	よむ	1	2	2	39	うへ	40	59	72
2	とき	2	5	6	40	なる	40	36.5	24
3	うた	3	1	13	41	ゆき	40	42	62
4	こころ	4	9	30	42	ところ	42.5	26.5	17
5	いふ	5	8	10	43	もの	42.5	49.5	20
6	つかはす	6	10	1	44	まうづ	44	39	65
7	たてまつる	7	7	34	45	おもふ	47	63.5	41
8	しる	8	3	4	46	その	47	55	55
9	だい	9	4	3	47	ひとびと	47	31	59
10	つき	10	17	42	48	めす	47	71	74
11	はな	11	24.5	19	49	をのこ	47	46.5	69.5
12	うたあはせ	12	6	23	50	かへる	50.5	40.5	35.5
13	いへ	13	12	14	51	はる	50.5	26.5	46.5
14	のち	14	20.5	30	52	あふ	52.5	49.5	33
15	す	15.5	15	11	53	しのぶ	52.5	49.5	38.5
16	はべり	15.5	24.5	18	54	かきつく	55.5	63.5	49
17	まかる	17	14	9	55	かへりごと	55.5	59	37
18	ひと	18	13	5	56	はじめて	55.5	74	69.5
19	みる	19	18	15	57	まへ	55.5	63.5	62
20	こと	20.5	11	21	58	ほど	58.5	67.5	52.5
21	もと	20.5	22	8	59	よ	58.5	44	55
22	をんな	22	19	7	60	かみ	61	74	57.5
23	あり	23.5	67.5	16	61	なし	61	59	43
24	まうす	23.5	30	62	62	ひさし	61	33.5	28
25	とし	25	35	30	63	ゐん	63	59	60
26	きく	27	33.5	22	64	あした	65.5	44	44
27	くに	27	46.5	32	65	あそん	65.5	38	26
28	ころ	27	20.5	35.5	66	すむ	65.5	44	52.5
29	うだいじん	30	67.5	75	67	とほし	65.5	74	72
30	ひ	30	36.5	25	68	かく	69	40.5	40
31	み	30	32	46.5	69	みち	69	67.5	49
32	なか	32	23	65	70	もみぢ	69	55	57.5
33	おなじ	34	71	51	71	うめ	73	59	68
34	かへし	34	16	12	72	さくら	73	71	38.5
35	やま	34	29	55	73	はは	73	55	65
36	あき	36.5	28	45	74	ふる	73	63.5	49
37	また	36.5	49.5	27	75	みゆ	73	53	67
38	ほととぎす	38	52	72					

表(7)

作 品 名	延 べ 語 数	比 率	基幹語延べ語数	比 率
三代集詞書	1,854	11.5	963	9.2
千 載 詞 書	1,035	14.8	482	9.6
新古今詞書	1,531	19.1	933	16.3

今詞書」と異なった、特異なものである点については既にふれた。ここでは、その特異性が何によっているのかについて考えることにする。

表(7)は、「千載詞書」「新古今詞書」

「三代集詞書」における漢語の延べ語数、基幹語での延べ語数を、各全延べ語数に対する比率とともに示したものである。

表(7)をみるとわかるように、「千載詞書」では、延べ語数における漢語の比率との関係において、基幹語彙における漢語の比率が「三代集詞書」「新古今詞書」よりも小さいようである。この基幹語彙における漢語の延べ語数での比率の小ささが、「千載詞書」における漢語の特異性に関係しているようである。

右の点をより具体的に言うと、基幹語の一つである「だい(題)」の使用度数の少なさが「千載詞書」の漢語使用比の特異性に関係している可能性があるということである。例えば、「新古今詞書」における「だい」の使用度数は二四九であるが、「千載詞書」において「新古今詞書」と同様な比率で「だい」が使用されたとすると、その度数は二二二となり、表(4)で示した比は〇・五七となる。また、「三代

集詞書」と同様な比率でそれが使用されたとすると、その度数は一九五、比は〇・五五となる。この数値でわかるように、「だい」の使用度数のみに「千載詞書」における漢語使用比の特異性の要因を求めることはできないであろうが、大に関係していることだけは確かである。

では、「千載詞書」において、何故「だい」という語の度数が少ないのであろうか。井上宗雄氏は、「千載和歌集」の詞書に関して、

千載集は複雑な題も単純な題もすべて「心をよめる」に統一されている。……(略)……単純な題も複雑な題も、要するにその美的本質(趣旨)を詠むという精神が強烈に確認されたからであろ⁽²³⁾うか。

とされているが、題詠の確立による「詞書」そのものの変容が影響していると考えてよさそうである。⁽²⁴⁾

八

以上、「千載詞書」の語彙について、いくつかの観点からみてきたが、ここでその要点を示すことにより、まとめたい。

1 「千載詞書」の語彙における異なり語数は一二五七語、延べ語数は六九九九語である。

2 延べ語数の一パーミル以上の度数を持つ語を基幹語とすると、「千載詞書」のそれは、異なり語数で一四一語、延べ語数で五〇〇七語となる。この五〇〇七語は、「千載詞書」の全延べ語数の七一・五四パーセントに当たる。

3 「千載詞書」における所属段階の方が「平安和文基本語彙」におけるそれよりも上位の七語のうち、「こひ(恋)」「たび(旅)」という二語は、時代語的要素を持ったものと言える。

4 「千載詞書」の基幹語彙のうち、「平安和文基本語彙」と共通しないものには、作者や時、場所・場面、題材等に関する語が多く含まれており、その意味で、「詞書」の語彙を特色づける語群であると言える。

5 「千載詞書」の語彙における漢語の異なり語数での比率は二九・二パーセントと、注目に値する高さであるが、ここには時代の反映が色濃くうかがえる。

6 「千載詞書」の語彙における漢語の使用は、延べ語数での比率と異なり語数での比率との関係において、「後撰詞書」や「新古今詞書」とは異質なものであると言える。

7 「千載詞書」の語彙は、品詞構成比上、名詞の比率が高く形容語類の比率が低い、「詞書」の語彙の特色とも考えられる性格を具備したものである。

8 「千載詞書」の語彙と他作品の語彙との共通語数では、語彙量の大きい「源氏物語」とのそれが圧倒的に多く、次いで、「新古今詞書」「大鏡」が並び、「三代集詞書」「徒然草」がそれらに続く。

9 共通度は、「新古今詞書」とのそれが最も高く、「三代集詞書」「伊勢物語」「更級日記」がそれに次ぐ。

10 順位相関係数からみると、「千載詞書」「新古今詞書」「三代集詞書」の各語彙の間には、それぞれ強い相関が認められる。特に、「千載詞書」の語彙と「新古今詞書」の語彙との相関係数は〇・七八六であり、非常に強い相関関係にあると言える。また、「千載詞書」の語彙と「三代集詞書」のそれとの相関より、「新古今詞書」の語彙と「三代集詞書」のそれとの相関の方が強い点も注目される。

11 6でもふれた「千載詞書」の語彙における漢語使用の特異性には、「千載詞書」における「だい(題)」という語の使用度数の少なさが大いに関係していると考えられる。

(注)

(1) 以下、用例や統計に関して『語い表』とした場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版古典対照語い表および使用法』(笠間書院刊)による。

(2) ただし、私意により読みを改めた箇所がある。

(3) 拙稿Ⅰ「三代集の『詞書』の語彙について」(『城西文学』一三〇号)、Ⅱ「(新古今和歌集)の『詞書』の語彙について」(『湘南文学』一九号)。以下、「三代集詞書」および「新古今詞書」に関しては、それぞれ前掲のものによる。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

(4) 拙稿Ⅲ「後撰和歌集」の『詞書』の語彙について」(『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』所収)、Ⅳ「拾遺和歌集」の『詞書』の語彙について」(『城西大学女子短期大学部紀要』八巻)。以下、

「後撰詞書」および「拾遺詞書」に関しては、それぞれ前掲のものによる。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

- (5) 大野晋氏「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』八七集)。

- (6) 西田直敏氏著『平家物語の文体論的研究』(明治書院刊)八四頁。

- (7) 樺島忠夫氏著『日本語はどう変わるか―語彙と文字―』(岩波新書 六八・七二頁)。

- (8) 「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「千載詞書」「新古今詞書」における「こひ(恋)」と「たび(旅)」の使用度数を示すと、表(イ)のようになる。

表(イ)

		こ ひ	た び
古	今	0	1
後	撰	1	6
拾	遺	0	3
千	載	105	25
新	古 今	68	26

- (9) (3)の拙稿Ⅱ。
- (10) 結び題での使用例もあるが、多くは時間に関するものである。
- (11) ほとんどが結び題での使用例である。
- (12) 結び題での使用例もあるが、多くは場所に関するものである。
- (13) 拙稿Ⅴ「古今和歌集」詞書の語彙について」(『湘南文学』一七号)。以下、「古今詞書」に関しては前掲のものによる。なお、語数・

比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

- (14) 「後撰詞書」の平均使用度数は五・四九、「新古今詞書」のそれは五・五六であり、「千載詞書」における数値とほぼ等しい。

- (15) 『語い表』所載の一四作品中、最も形容語類の比率の低い作品は、『万葉集』の七・一パーセントである。また、「千載詞書」の延べ語数における形容語類の比率は三・四パーセントである。一方、前述の一四作品では、ほとんどの作品において、異なり語数における比率より、延べ語数における比率の方が高い点からすると、この三・四パーセントという数値は注目し値するものであろう。

- (16) 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版刊)の「詞書・左注」の項(井出至氏担当)。

- (17) かつて調査した各「詞書」の形容語類の異なり語数における比率は、「古今詞書」が六・六パーセント、「後撰詞書」が九・二パーセント、「拾遺詞書」が五・二パーセント、「新古今詞書」が六・二パーセントである。

- (18) 共通度は、水谷静夫氏が「語彙の共通度について」(『計量国語学』七号)で示された計算式によった。

- (19) 「千載詞書」と異なり語数において大差のない「拾遺詞書」と「大鏡」「徒然草」との共通語数は、それぞれ七二七語、五七七語と、「千載詞書」と「大鏡」「徒然草」との共通語数よりも多い。各作品の成立年代を考慮すると、「千載詞書」と「大鏡」「徒然草」との共通語数は少ないとも言えよう。また、「拾遺詞書」と「大鏡」との共通語数は、「拾遺詞書」の全異なり語数の五六・五パーセント、「千載詞書」と「大鏡」とのそれは五一・九パーセントであることからしても、前述のことは言えそうである。

- (20) 田中章夫氏が「語彙研究における順位の扱い」(『国語語彙史の研究 七』所収)に示されているものによった。

- (21) 関係数は、「三代集詞書」と「古今詞書」とが〇・七六八、「三

代集詞書」と「後撰詞書」とが〇・八二三、「三代集詞書」と「拾遺詞書」とが〇・八四四である。

(22) 「新古今詞書」延べ語数／「新古今詞書」での「だい」の使用度数
 Ⅱ「千載詞書」延べ語数－「千載詞書」での「だい」の使用度数＋
 X／XによりXⅡ＝二三を得た。また、「三代集詞書」に関しても、
 同様な計算を行い、一九五という度数を得た。

(23) 井上宗雄氏「再び『心を詠める』について―後拾遺・金葉集にみ
 られる詞書の一傾向―」（『立教大学日本文学』三九号）。

(24) 題詠の確立が、「題知らず」の減少と「心を詠める」の増加とい
 う形で典型的に表れるとするならば、以下に示した「千載詞書」にお
 ける「こころ（心）」の使用度数の多さも、その傍証となろう。

表(ロ)は、各「詞書」における「こころ」の度数と、全延べ語数
 に対する「こころ」の比率をまとめたものである。

表(ロ)

	こころ	比 率
古 今	6	0.15
後 撰	53	0.76
拾 遺	4	0.08
千 載	304	4.34
新 古 今	150	1.87

(一九九一・九・三〇)

(資料) 「千載詞書」の基幹語彙

順位	単語		度数
一	よむ	詠	七八五
二	とき	時	三八二
三	うた	歌	三五五
四	ころ	心	三〇四
五	いふ	言	二一七
六	ひやくしゆ	百首	一五七
七	つかはす	遣	一〇八
八	こひ	恋	一〇五
九	たてまつる	奉	一〇一
一〇	しる	知	八三
一一	だい	題	七六
一二	つき	月	七四
一三	はな	花	七二
一四	うたあはせ	歌合	七〇
一五	いへ	家	六五
一六	のち	後	五八
一七	す	為	五四
一八	はべり	侍	五四
一九	まかる	罷	五三
二〇	ひと	人	五二
二一	ほりかはるん	堀川院	四八
二二	みる	見	四〇
二三	こと	事	三七
二四	もと	元本下	三七
二五	さき	先前	三二

順位	単語		度数
二六	をんな	女	三一
二七	あり	有	二九
二八	まうす	申	二九
二九	とし	年	二八
三〇	きく	聞	二七
三一	くに	国	二七
三二	ころ	頃	二七
三三	うだいじん	右大臣	二六
三四	ひ	日	二六
三五	み	身	二六
三六	たび	旅	二五
三七	なか	中	二五
三八	おなじ	同	二四
三九	かへし	返事	二四
四〇	やしろ	社	二四
四一	やま	山	二四
四二	あき	秋	二二
四三	じゆつくわい	述懐	二二
四四	また	又	二二
四五	かくる	隠	二二
四六	ほととぎす	時鳥	二一
四七	まある	参	二〇
四八	うへ	上	一九
四九	なる	成	一九
五〇	ゆき	雪	一九

順位	単語		度数
五一	くれ	暮	一八
五二	ところ	所	一八
五三	もの	物者	一八
五四	かの	彼	一七
五五	まうづ	詣	一七
五六	うち	内内裏	一六
五七	おもふ	思	一六
五八	その	其	一六
五九	だいじやうゑ	大嘗会	一六
六〇	だいなごん	大納言	一六
六一	ひとびと	人人	一六
六二	めす	召	一六
六三	をのこ	男	一六
六四	かへる	帰	一五
六五	すつくあん	崇徳院	一五
六六	せつしやう	摂政	一五
六七	にふだう	入道	一五
六八	はる	春	一五
六九	あふ	逢	一四
七〇	しのぶ	忍	一四
七一	ちゆうじやう	中将	一四
七二	ほふしやうじ	寺名	一四
七三	よし	由	一四
七四	かきつく	書付	一三
七五	かへりごと	返言	一三

順位	単語		度数
七六	だいじやう だいじん	太政大臣	一三
七七	ないだいじん	内大臣	一三
七八	はじめて	始	一三
七九	まへ	前	一三
八〇	かも	地名	一二
八一	のぼる	上	一二
八二	ほど	程	一二
八三	やまでら	山寺	一二
八四	よ	夜	一二
八五	かみ	上守	一一
八六	ちぎる	契	一一
八七	ちゆうなごん	中納言	一一
八八	なし	無	一一
八九	にようぼう	女房	一一
九〇	ひさし	久	一一
九一	やす	寄	一一
九二	あかつき	暁	一〇
九三	じつしゆ	十首	一〇
九四	にでうあん	二条院	一〇
九五	にねん	二年	一〇
九六	まつ	松	一〇
九七	みゆき	御行	一〇
九八	あん	院	一〇
九九	あした	朝	九

順位	単語	度数
一〇〇	あそん	九
一〇一	いづ	九
一〇二	いはひ	九
一〇三	おちば	九
一〇四	すむ	九
一〇五	たつ	九
一〇六	つかうまつる	九
一〇七	とほし	九
一〇八	なく	九
一〇九	みこ	九
一一〇	よ	九
一一一	かく	八
一一二	ぐわんねん	八
一一三	しぐれ	八
一一四	とばどの	八
一一五	みち	八
一一六	みづ	八
一一七	もみち	八
一一八	やどり	八
一一九	ゆきがた	八
一二〇	ゆく	八
一二一	うのはな	七
一二二	うめ	七
一二三	こもりゐる	七
一二四	こもる	七
一二五	さくら	七
	桜 籠 籠居 梅 卯花 行 悠紀方 宿 紅葉 水 道 鳥羽殿 時雨 元年 書 世代 御子 泣鳴 遠 仕 立 住 落葉 祝 出 朝臣	

順位	単語	度数
一二六	しらかはみん	七
一二七	すぎがた	七
一二八	せきち	七
一二九	ついで	七
一三〇	としただ	七
一三一	なかのあん	七
一三二	ながつき	七
一三三	なげく	七
一三四	なつ	七
一三五	はじめ	七
一三六	はは	七
一三七	ふる	七
一三八	みゆ	七
一三九	わたる	七
一四〇	わづらふ	七
一四一	をとこ	七
	男 類 渡 見 降 母 始 夏 嘆 九月 中院 人名 序 関路 主基方 白河院	